

概要報告

実施期日	7月29日(火)【午前】
部会名	小学校 特別活動部会

テーマ 『望ましい集団活動を通して、楽しい学級生活を実現する』
題材：11月の生活目標『感謝の心をもとう』を達成しよう

提案概要

<実践の概要>

○言語活動を充実させる年間を見通した取組

言語活動を充実させるために、各教科でグループ活動を多く取り入れた。少人数で活動することで、自分の考えを伝えやすい環境づくりを心がけた。この活動を取り入れることで、学級会という大集団になったときも発言しやすい環境になると考えた。

○思考力、判断力、表現力等を育む学習プロセスづくりの工夫

学級会を行うにあたって、必ず原案を作成するようにした。(提案する児童が原案を作成)原案を事前に配付し、個人の意見を書かせ、それを一度回収し担任が目を通してコメントを入れ、学級会当日までに本人に返却をする。自信をもって発言できる環境をつくった。また、司会グループとは、事前に打ち合わせを重ね、自分たちで進行ができるように支援をした。

<成果と課題>

原案をつくったことで、何について話し合っているのかが明確になり筋道の通った話し合い活動ができるようになった。また、原案を事前に配付し自分の考えを書かせ、それを回収してコメントを入れておくことで子どもたちが自信をもって発言できるようになっていた。ほんの一言のコメントでも子どもたちにとっては大きな自信につながっていたようだ。4月の頃は、「恥ずかしいし、みんなにどう思われるか不安だから話し合いが苦手だ」と言っていた子どもも、2学期の頃にはしっかりと発言ができるようになっていた。今回の活動に取り組んだ後、子どもたちはどんなに小さなことでも「ありがとう」と言えるようになったと感じる。学習課題が分からなくて悩んでいるときに教えてもらおうと手紙で感謝の気持ちを伝えるという姿も見られるようになった。また、率先して教え合う姿も見られるようになった。そして、6年生になった現在でも継続して、この活動は続いている。しかし一方ではマンネリ化してきているという声も出てきている。その点を改善するために児童がどのように考え、創意工夫していくのかを見守っていきたい。

質疑概要

Q:これまでの過程(話し合いに意欲的に取り組む子どもたちの姿勢等)について

A:司会や進行の動きを繰り返し伝えて指導する。はきはき喋れる子を見つけて褒めること。

Q:議題設定をどのようにしているか。

A:子どもの困り感を議題に結び付けたり、年間行事や生活目標に即して設定したりしている。

Q:他教科との関連について

A:国語では話し合い活動、社会では人物になりきって話をさせる等の活動。

Q:司会の子をどのように育てたらよいか。

A:司会の子に対して繰り返し指導をしたり、全体に向けての話し合い活動に対しての指導をしたりする。

Q:話し合いはグループですか、全体でいきなり話し合いするのか。

A:学級会では全体での話し合いにすぐに入るといった流れで成立している。話し合いがうまく進まないときには、進行の子が中に入る等している。

Q:ありがとうカードがもらえない子への配慮について

A:字を書くことが苦手な子や、もともと自分ありがとうカードを出していない子も多い。MVP係がポストをチェックして、出していない子には「出して」と声かけをしたり、もらえない子にはMVP係の子が出してあげたりしている。

Q: ありがとうカードを書く時間を設けているのか

A: 設けていない。空いている時間に用紙を取りに行き書いてもらう。

研究協議概要

7グループに分かれ、協議の柱を中心に話し合った。各校の実践例や感想などを出し合った。

○協議の柱『話し合い活動を充実させる方法や取組について』

- ・「学級活動」として時間をとるのはなかなか難しいため、帰りの時間を使う等工夫が必要である。
- ・「原案ファイル」があることで、自分の意見・考えを持ったうえで話し合いに臨める。
- ・先生が原案ファイルを回収し、コメントを入れることにより、子どもたちは自分の考えに自信をもって発言することができる。
- ・原案ファイルに書き込むことで、子どもたちの書く力が身に付く。これまでの積み重ねが目に見える。
- ・原案ファイルに沿って話し合いを進めることで、話し合いの進行もスムーズになる。
- ・議題は、子どもたちの実態に即したテーマであることが大事である。
- ・MVP係による「ありがとうキャンペーン」の脱マンネリ化のため、もう一言付け加えて具体的なコメントにしたり、四字熟語を使ったコメント等テーマを決めたりするなどの工夫が必要である。
- ・「ありがとうカード」に取り組むことにより、自己肯定感向上につながる。
- ・話し合いでは、低学年の子が司会をする時には台本を用意してあげる等、学年の発達段階に沿って配慮をする。
- ・話し合いを通して、譲り合うことや自分以外の意見もあることに気づけると良い。
- ・話し合いは指導の一環になりがちで、道徳的になってしまったり、単発になってしまったりする。
- ・原案を書き込む時間を確保してあげることが必要である。宿題に出したり、帰りの時間を使ったりする等工夫があって良い。
- ・自分の意見を書くスペースだけでなく、友達の意見を書き込むスペースがあっても良いのではないかと。

まとめ概要

今回の提案では、原案を作成しての話し合い活動がいかに有効であるかが示された。宿題に出す等、時間を保証することで、子どもたちは原案に自分の考えをしっかりと書くことができる。子どもたちが書いた原案を先生が回収して赤ペンでコメントを入れることにより、子どもたちは自分の考えに自信をもつことができる。自分の考えに自信をもった子どもたちは学級会のなかで全員が話し合いに意欲的に取り組めるようになり、一人ひとりの自己肯定感を育てることもつながる。とても良いサイクルで、子どもたちが主体的に話し合い活動に取り組む様子が見られた。

MVP係による「ありがとうキャンペーン」では、係の子どもたちが中心となりクラス全体に呼びかけをする姿が目に見え、とても良い活動であった。友達に直接渡すのではなく、専用のポストに入れたものをMVP係が一度目を通して渡すので、カードを出していない子には「出して」と声をかけたり、カードをもらえない子にはMVP係の子が書いて出してあげる等の配慮もできている。これは先生が子どもに指示したのではなく、子どもたちが自分たちで考えて動いていることである。自分たちの係活動に誇りをもって活動している様子が伝わってきた。継続して行ってきたことにより、マンネリ化が見られるため、具体的にもう一言付け加えたり、テーマを決めて書かせる等の工夫ができるのではないかと結論に至った。

話し合い活動が、最初からスムーズにいくわけではない。最初は先生が司会・進行の子どもを集めて話し合いの流れを相談したり、シュミレーションしたりする。繰り返し指導することや、ある程度場数をふむことで、徐々に力がついてくるものである。話し合いの中で人の意見を聞き、譲り合い、折り合いをつけることや、すぐに多数決で決定するのではなく、できるかぎり意見を調整することが大切であることを指導していかなければならない。

話し合い活動がうまくいくには、みんなが意見を言いやすい環境を作ることや、いろんな意見のいいところを取り入れるようにすると良い。特別活動が充実することにより、学力向上や、よりよい学級経営等につながり、いじめや不登校の未然防止にもなる。学級だけでなく学校全体で取り組んでいく必要があるが、そのためには職員共通の理解が大切になってくる。共通理解をしたうえで、それぞれの学級担任が指導計画を作成し取り組んでいく必要がある。